

日本列島の貝塚と加曾利貝塚

堀越 正行

1. 貝塚の発見と増加の歩み

(1) 全国の貝塚分布

貝塚という言葉には、「貝塚を有する遺跡全体を表す名称」と「遺跡を構成する部分的な遺構として捉えられるもの」(中村 1994) という 2 種類の使われ方があると中村若枝は解説する。例えば、加曾利貝塚という遺跡全体の呼び方は前者、そのうちの北貝塚という一部分を指す呼び方は後者の使われ方ということになる。また貝層は、「貝塚を堆積物として捉えるときの用語」と定義されている。ここでは、貝塚を「貝塚を有する遺跡全体を表す名称」とする。

日本列島で研究の対象として認識された貝塚の第 1 号は、言うまでもなく 1877 年に E.S. Morse が発見した東京都品川区大森貝塚である。この発見と報告が契機となり、日本の歴史や民族の成り立ちなどを遺跡・遺物により解明しようとする研究がはじまる。とりわけ貝塚は、不自然な場所に貝殻が散布するため発見し易く、土器・石器だけでなく骨を残す頗著な特性を持つため、活発となった人種論の直接的証拠としての人骨の収集を目指すことによって、その発見と発掘が急速に進んで行った。

考古学研究が開始された当初の貝塚の集成は、埼玉・東京・横浜の間 (坪井 1886a) や下総・武藏・相模 (若林 1892) という限られた地域の貝塚分布図の作成に止まっていた。これは東京に研究者が多く、かつ近郊に盛んに踏査に出掛けたことによる。1897 年に人類学教室編で東京帝国大学が『日本石器時代人民遺物発見地名表』(以下『地名表』と略記) 第 1 版を発行したことにより、石器時代の貝塚に限らないが、はじめて全国的な貝塚分布の様子が分かるようになった。加曾利貝塚も登載されているが、1887 年の上田英吉による紹介 (上田 1887) が初出なので、『地名表』第 1 版では「千葉郡加曾利村屋敷貝塚 上田英吉報 19」と記載されている。加曾利は旧村名、1889 年以降は大字で、加曾利貝塚に落ち着くのは後のことであるが、公式な小字は「享顧台」(「京顧台」は誤読)なので「屋敷」は俗称であろう。第 1 版の全国の貝塚数は 229 か所、そのうち関東地方に 175 か所、約 76% が集中していた。『地名表』第 2 版は第 1 版の翌年に発行されており、第 1 版の記載漏れ情報を増補したという面が強い。全国の貝塚数は 260 か所で、そのうち関東地方は 203 か所、約 78% となっている。

1901 年の『地名表』第 3 版が発行された後、日本の石器時代の貝塚数を調べて欲しいという依頼を受けた坪井正五郎は、1904 年末の情報に基づいて貝塚の旧国別の数を調べ、その結果を『東京人類学会雑誌』で公表した (坪井 1905)。これは、はじめて石器時代という時代を限定した貝塚数を集計したという点に意義を有する。全国の貝塚数 326 か所あるうち、関東地方の貝塚は 263 か所、実に 80% に上り、依然として関東地方で多くの貝塚の発見が続いていることもあって、石器時代の貝塚は圧倒的に関東地方に多いことが数字的にも明らかにされたのである。1917 年の『地名表』第 4 版は 404 か所であるが、東京帝国大学地理学教室の東木龍七は、これを利用して関東平野の 5 万分の 1 地形図に貝塚の位置を記入し、地形と貝塚の関係を検討して過去の海を推定した (東木 1926a・b)。また八幡一郎もこれに新資料を加え、貝塚の分布を旧国別の数だけでなく、はじめてその全国の分布図をも作成して示した (八幡 1929)。全貝塚

数は554か所とされたが、1村を1点として図に落としたため、正確な表示にはなっていないのは止むを得ないことであろう。関東地方の貝塚は337か所で全国の約60%に低下しているものの、分布図によつてその集中ぶりは一目して明らかとなつたのである。

東京帝国大学人類学教室がまとめた『地名表』は、1928年の第5版(527か所)及び1930年の増補別冊(72か所)の追加発行が最後となった。『地名表』第5版になってはじめて貝塚数が集計されたのであるが、旧国別であつて県別にはなっていない。この結果を踏まえ、1935年に田澤金吾は貝塚を多角的に概説する中で、関東地方440か所、奥羽地方95か所、東海地方45か所などと日本の貝塚670か所を地方毎に数え、その分布を解説した(田澤1935)。この論文は、戦前の貝塚研究の集大成と位置付けできるものであり、ほぼ同内容の論文が1940年にも発表されている(田澤1940)。

1959年に出版された『日本貝塚地名表』は、酒詰仲男が「徹底した地名表は、一つの最も重大な、最後的綜合であると余は考える」(土岐1935)という信念の下で、「戦争中に一応地名表を完成した」(酒詰1959)全国の貝塚の戸籍簿といるべきものであり、『日本貝塚地名表』第2表の中に「昭20」の欄を設けて貝塚数が示されているのは、説明は無いものの自らの調査の区切りとしてその記録を残したものであろう。『日本貝塚地名表』で酒詰は『地名表』第1版から第5版までの貝塚数を改めて県別に集計しており、これに更に後日の集計を加えて第1表で示した。第1表に酒詰1959Aと酒詰1959Bの2種があるのは、1959Aは『日本貝塚地名表』の第2表の合計数、1959Bは第1表の合計数であるが、数字が合わないため双方を下表に掲出した。尚、『日本貝塚地名表』の本文中に登録された各地方の貝塚番号は1959Aに一致する。『地名表』第5版の増補別冊刊行から15年後に約2.4倍、29年後に約3.9倍もの貝塚数が増加したのは、各地の研究者の協力を得ながら全国を限なく歩いて貝塚を踏査した酒詰の超人的な活動によるものであり、各貝塚出土の動植物遺存体の集成とその研究(酒詰1961)と共に、今日でも貝塚研究に不可欠な著作として位置付けられる。

この酒詰地名表を点検し、修正した数字が2種発表されている。第1表中の「岡田1968」と「金子1980」がそれである。このうち岡田茂弘の数字は「洞窟や一般の遺物包含地の堆積層中に若干の貝殻が検出された程度の貝塚と呼ぶにふさわしくない遺跡」を除いたもの、金子浩昌の数字は『日本貝塚地名表』より牛沢百合子が算出したものとされているが、酒詰の示した数字との異同の理由は示されていない。

	I版 1897	II版 1898	III版 1901	IV版 1917	V版 1928	八幡 1929	V版増 1930	酒詰 1945	酒詰 1959A	酒詰 1959B	岡田 1968	金子 1980	文保委 1968	文化庁 2001
北海道	10	10	10	13	20	35	33	75	127	127	122	127	73	187
東北	19	20	25	44	99	49	103	195	280	280	262	236	273	546
関東	175	203	233	289	322	337	341	659	1,007	1,038	1,022	1,038	892	1,601
中部	8	9	13	24	35	40	43	152	200	210	192	185	208	314
日本海側													62	
近畿	1	1	1	2	4	4	5	30	43	48	44	35	50	59
中国	5	5	5	5	12	52	32	195	240	305	301	294	332	548
四国	2	2	2	2	2	4	5	42	46	46	43	46	42	42
九州	9	10	12	22	30	31	34	116	155	210	203	209	278	373
沖縄					3	3	4	3	9	73	73	含まず	含まず	304
合計	229	260	301	404	527	556	599	1,473	2,171	2,337	2,189	2,232	2,148	3,974

第1表 全国の地方別貝塚数の推移一覧

	坪井 1905	田澤 1935	酒詰 1959	金子 1980	竹内編 1983	堀越 2015
北海道	11	含まず	11	35	64	80
東北	19	95	190	146	339	514
関東	263	440	664	633	587	1,659
中部	13	59	89	37	61	124
日本海側				29		
近畿	1	2	14	6	含まず	14
中国	5	36	62	34	44	44
四国	2	2	17	4	11	11
九州	12	36	61	49	139	138
沖縄	含まず	含まず	含まず	含まず	含まず	104
合計	326	670	1,108	973	1,245	2,688

第2表 全国の地方別縄文時代貝塚数の推移一覧

及び別巻『考古遺跡・遺物地名表』は、全国の縄文貝塚の地名表と分布図の併用という点で画期的であるが、細別時期や所在位置が不明な貝塚は除外されたため関東地方では大きく減少し、また近畿地方など未掲載となった地方があるため不完全である。この頃から各県毎の貝塚の分布調査に基づく報告書の刊行が進んで行った。

筆者が2015年現在で纏めた関東地方の縄文時代の貝塚数は1,659か所で、これは全国の61.7%になる(堀越2015)。各県の内訳は、千葉県763か所(全国の28.4%、関東の46.0%)、茨城県404か所(全国の15.0%、関東の24.4%)、神奈川県186か所(全国の6.9%、関東の11.2%)、東京都161か所(全国の6.0%、関東の9.7%)、埼玉県123か所(全国の4.6%、関東の7.4%)、栃木県13か所(全国の0.48%、関東の0.78%)、群馬県か9所(全国の0.33%、関東の0.54%)となっているが、新しい情報の探索は尚も不十分であることは否めない。

四隅を海に囲まれた日本列島であるが、29,751kmの長い海岸線に沿って均等に貝塚がつくられていた訳ではなく、地区により分布の粗密が著しく異なることは、貝塚の発見が進みつつある段階で早くも指摘されていたことである。既に滅滅してしまった貝塚は措くとして、最近新たに発見される貝塚の多くは、地表では気付かない小規模な遺構内の陥没貝層からなる貝塚が殆どであるが、千葉県大網白里市養安寺貝塚のように、規模の大きな斜面貝塚が2007年になって新規に発見された例もあるから、未だ貝塚遺跡数は増加していくに違いない。

(2) 千葉県の貝塚分布

先ず関東地方の貝塚の分布状況について、どのように紹介されてきたのかを簡単に概観したい。関東地方の貝塚、それも縄文貝塚が多数分布することについては、貝塚研究の当初から周知されていたことである。戰前においては、1935年に田澤金吾が関東地方の貝塚は「我が貝塚の約7割を占めてゐて、(略)旧東京湾系の貝塚が最多であつて、霞ヶ浦鬼怒川系の貝塚がこれに次ぎ、那珂久慈の両河口附近は更に僅少となつてゐる。相模川河口附近は寡少である」(田澤1935)と解説していた。

戰後になって貝塚集成を踏まえた研究として注目されるのは、1952年の酒詰仲男が関東地方の石器時代の貝塚536か所を地区別・時期別に示し、海進海退を絡めながら貝塚分布から関東縄文人の動静について時期を追って概観した研究である(酒詰1952)。その結びには「遺跡遺物の今後の精査と概観によって、

「文保委1968」は1960-62年度に実施された全国の遺跡分布調査に基づき文化財保護委員会が作成した『全国遺跡台帳』に登録された貝塚数で、調査時に「存在した貝塚にその後発見された貝塚若干を追加した総数である」(岡田1968)という。「文化庁2001」は2001年3月現在の文化庁が集計した全貝塚のデータ(文化庁文化財部記念物課2001)で、『地名表』第1版から100年間で17倍も増加している。第2表は、縄文時代とされる貝塚を地方別に集計したもので、坪井から110年間で8倍に増加している。1983年の竹内理三編『日本歴史地図原始古代編』

2018年3月

なお一層詳密化され、検討されなければならぬ」とあるが、自身が踏査して得た貝塚情報を駆使した酒詰しかできない関東全域を俯瞰した貝塚研究であるため、これ程の広い地域を扱った後繼の研究は見られない。

その後、西村正衛は「関東地方において、前期前半の埼玉県大宮、岩槻丘陵を中心とした奥東京湾の沖積地域、前期後半の神奈川県の東京湾沿岸部および霞ヶ浦周辺部、中期なかごろの霞ヶ浦周辺と利根川下流域、中期後半から後期の千葉県市川市から木更津にわたる東京湾沿岸部は、他に比して多くの貝塚と大貝塚がみられるところである」(西村 1974)と、時期と地域により貝塚集中地が変わっていることを示した。

千葉県の貝塚については、伊藤和夫が1955年に自費で2冊まで刊行した『千葉県縄文遺跡地名表』第1輯(千葉郡東部及千葉市的一部分)と第2輯(千葉市、千葉郡西部及印旛郡南部)の成果(伊藤 1955)を、千葉県教育委員会が全県に広げた作成を依頼し、1959年に完成させた『千葉県石器時代遺跡地名表』(伊藤 1959a)が最初の文献である。千葉県の縄文時代遺跡は721遺跡あり、うち貝塚は310か所が登録されている。同時に刊行された酒詰の『日本貝塚地名表』(酒詰 1959)では千葉県分は339貝塚となっているが、このうち縄文という明記の無い79貝塚を除くと、縄文時代としては260貝塚となる。共に貝塚として疑わしいものや重複登録も未だ含まれており、実数は更に減ることになる。

1983年には、千葉県教育委員会が国庫補助を得て1980-82年度に実施した千葉県所在貝塚詳細分布調査の報告書が、551か所の貝塚一覧の他、研究史、概論、文献一覧などを加えて刊行された(千葉県教育委員会 1983)。縄文時代に限るものではないが、千葉県の貝塚について多角的に纏めた文献としての役割を果している。その後、1999年に千葉県文化財センターが県内の縄文貝塚地名表と分布図を作成したものが最新の基礎文献である(千葉県文化財センター 1999)。これには江戸時代の江戸川開削工事によって分断され、今の埼玉県側に編入された下総台地の28貝塚も加えられて合計743貝塚が登録されており、より縄文時代の状況を反映したものとなっている。

堀越 2015 の第1表「千葉県の地区別縄文時代貝塚集計表」は、千葉県文化財センター 1999 の第61表に追加や削除と水系の組み換えをした再集計にすぎないが、この時点での千葉県の縄文時代貝塚数は763か所、埼玉県編入分 28 貝塚を含めると 791 か所である。これを大まかな地形単位で地区別に数えると、逆時計回りで奥東京湾東岸地区(関宿~市川間)149か所、東京湾内湾部東岸地区(市川~富津岬間)347か所、東京湾外湾部東岸地区(内房地区、富津岬~洲崎間)13か所、外房地区(洲崎~太東崎間)16か所、九十九里浜地区(太東崎~犬吠埼間)70か所、古鬼怒湾南岸地区(犬吠埼~関宿間)196か所となる。加曾利貝塚のある東京湾内湾部東岸地区が43.9%という圧倒的な集中を示し、古鬼怒湾南岸地区が24.8%、奥東京湾東岸地区が18.8%、九十九里浜地区が8.8%、外房地区が2.0%、東京湾外湾部東岸地区が1.6%の順となる。これを海岸の違いで区分すると、上位4地区の浜地域と下位2地区的磯地域に分けられ、浜地域は762か所(96.3%)、磯地域は29か所(3.7%)となるから、貝塚は圧倒的に台地部の浜地域につくられ、丘陵部の磯地域は僅かしかつくられていないことが分かる。これは、房総半島南部は間歇的な隆起地域なので遠浅の干潟の発達が悪いなど、浜と磯とでは食用に適した貝の生産量に大きな差があったことが反映されていると考えられる。

尚、千葉県の縄文貝塚についての時期別詳細は、『千葉県の歴史 資料編 考古4』で西野雅人が詳しく解説(西野 2004)しており、県内の貝塚の概要を知る良い手引きとなっているのでこれに譲る。

(3) 貝塚分布の偏りについて

縄文時代には、低位海面期、海面上昇期、高位海面期、海面遞減期という顕著な海面変動が起きているため、海岸線は大きく変化していたことは明らかである。そのうち低位海面期から海面上昇期までの間につくられた貝塚の多くは、現海面下に没してしまったか、浸食により消失してしまったことに留意する必要があるけれども、飽く迄も現代まで陸側に残った貝塚で検討せざるを得ない。

貝塚の分布を文章として解説したものとしては、1900年に沼田頼輔が「貝塚の分布は、西南地方には少なくして、関東地方には多くある。是より東北に至るも又少くして、北海道には割合に小なきようである」(沼田 1900)とした俯瞰が初期のものである。1929年には八幡一郎が「最も濃厚の分布区域は九州西部有明湾地方、瀬戸内海地方、伊勢湾、渥美湾地方、東京湾地方、霞ヶ浦沿岸地方、陸前海岸地方であって、概して外海に面する場所よりも内海内湾に沿ふてゐる。一般に太平洋方面に比して日本海方面は貧弱である」と、貝塚の分布に地方的な偏りが大きく、とりわけ日本海側に貝塚が少ないことを指摘し、その理由について「日本海方面は海岸線変化に乏しく、貝塚を積成し得る程度の貝類の蓄殖に適する江湾の発達が劣る為であらう」と説明した(八幡 1929)。一方、日本海沿岸に貝塚が少ない理由を、山内清男は潮汐の差が少ないと(山内 1934)、直良信夫は「その大部分が、陸地の後退」(直良 1955)を挙げていた。そして1935年に田澤金吾は、「関東奥羽の両地方に於て全国の八割以上を占めて居り、東海方面にては遠江日本海方面に於ては能登半島以西に於ては格段の等差を有して貝塚の数が減少してゐる」と、「日本海方面は一般に貝類の棲息並に貝類の採集にも適當しなかつたらしく貝塚も數少なく」と指摘した(田澤 1935)が、これに対して「日本海沿岸が貝類の生産に乏しかつたために貝塚がつくられなかつた等といふ事は考へ得られない」(直良 1938)という反論もある。また新潟平野では「今から5400年前、4000年前、2200年前に地震のために地面が沈んで、海が入り込んだ」(古沢 2015)ことが指摘されているが、急激な地形変更もまた貝塚形成にマイナスに影響していたことは間違いない。

以上を勘案すると、海がすぐ深くなる海岸や潮汐の差が少ない海岸は、干満によって汀線が行き來する前浜(潮間帯)が狭いため貝類の大繁殖は望めず、貝塚はできにくい。これに対して川の河口につくられた入江には、土砂による埋積が進んで遠浅の干潟ができやすく、これに潮汐の差が大きければ貝類の繁殖も望める。そのような川が多ければ入江も多くなり、それだけ各地に多くの貝塚がつくられる条件が整うことになる。関東地方に縄文時代の貝塚が多いのは、このような条件を満たした場所が各地にあったからということであろう。

茨城県南部の鹿島・行方台地・新治台地・筑波・稻敷台地・猿島台地・千葉県北部の下総台地・埼玉県東部の大宮台地・東京都東部の武藏野台地・神奈川県東部の下末吉台地に貝塚が集中しているのは、これらの土地が関東構造盆地運動という沈降運動によって形成されたかつての古東京湾の海底で、最終氷期の海面低下で陸化した後に降下した火山灰が堆積して台地化した土地であることに大いに関係している。それら関東平野の台地は、海底時代の砂や泥、その後の陸地になって以降のロームなど未固結の地層からなっているため、海面が上昇した高海面期には各地に溺れ谷が生まれ、台地は波の浸食力によって海蝕台と海蝕崖が発達し、更に削られた土砂によって旧河谷の埋積が進んだことにより、とりわけ拡大した谷口低地に広くて平坦な干潟が生まれたのである。

「千葉県北部の東京湾東岸には、おびただしい数の貝塚がある。おそらく、この地域はわが国最高の貝塚密集地帯であろう」(岡本 1963)と言われ、また「特に東京湾岸の市川市から木更津市にかけての一帯

2018年3月

には、縄文時代の中期から後期にわたる大規模な貝塚が群在し、あたかも「貝塚銀座」とでもいえるような状態を示している」(鈴木1979)と言われているが、細かく見ると小櫃川のような大きな谷や、逆に小さな谷の流域よりも、市川市の国分川・大柏川の合流する河口、千葉市の都川・葭川が合流する河口、千葉市・市原市境を流れる村田川の河口のような、中規模な川の河口が形成された谷の流域に多くなっている。これは、台地を開析する中規模河川の河口部に形成された東京湾という内湾の中の更に小さな内湾で、軟らかな地質からなる台地の浸食作用によって湾の拡大と旧河谷の埋積が急速に進んだことで、貝類の繁殖に適した遠浅の干潟が形成されたことによるものと考えられる。海に行けばどこにでも貝塚をつくるほど食用に適した貝が生息していた訳ではなく、自然の営みが生んだ豊穣の海は、時の移ろいに従って変化していくため、恵まれた自然は限られるのであり、そこに住む縄文人が受けた恩恵も、時期により異なっていたことに留意する必要がある。都川・葭川が合流する河口や村田川の河口などに広い干潟が生まれたと想定される千葉市に、縄文時代中期・後期の貝塚が多数つくられたのは、この海の恵みを背景とした、それを積極的に享受した縄文人の活発な活動によるものなのである。

(4) 海に面しない貝塚と10m海進説

武藏国の地誌『新編武藏風土記稿』(1810年起稿、1830年完成)足立郡貝塚村の条に、「此村元来一大貝塚アリ貝殻地ニ布ケリ名ヲ得ル所以ナリ云此地往古海浜ノ地ナリ故ニ村内八百比丘尼ノ船驚キ松アリ」という記事を見つけた神風山人こと白井光太郎は、1883年の踏査でこの埼玉県川口市新郷貝塚を発見している(神風1887)。これにより、足立郡貝塚村の村人たち、貝殻の散布を昔の人のつくった貝塚として認め、この地はかつて海辺であったと理解していたことを知るのである。八百比丘尼の件は別にしても、昔、海が傍に来ていた時に貝塚がつくられたという想定は、「凡ソ介墟ハ河岸海浜ニ成ルヘキ勿論ナレハ若シ内地ニアラハ是レ其千百年間ノ変遷ニ遭フテ終ニ偶々陸地ノ水ニ代ルモノト為スベシ」(モールス1879)と述べていたMorseの説明原理と何等変わることろがない。

とはいっても、貝塚と海が実際にどれほど離れたいたのかという点の抱くイメージには大きな個人差がある。明治時代以降、「如何に昔の人が時を貴ばなかつたにもせよ、無益な労力を費して熊々遠い所から貝を運んで来たとは思はれない。近傍に産する貝類を探って食用に供したとすれば、海が近い所に有つたに相違無い」(坪井1904)という考え方が高じて、貝塚の麓下が当時海であったと口頭や書物を通して説明されて行く。この理解の延長として、先述の東木龍七による貝塚の分布から旧海岸線を推定する研究が生まれる。「溪谷の地形を警見するに恰も細長い溺れ谷を見るやうであるが、殊に溪谷底の標高10m附近まではそれが顯著であつて其溪谷底は溺れ谷の干潟を想わせる。今仮に溪谷底の標高10mまで海水が侵入したとすれば其海岸線と其海平面下に覆はるゝ溪谷底の輪郭線とは其形状極めて類似し」(東木1926a)、「湾頭が、現今の溪谷底の標高10m内外の地点に来た時に貝塚の成立が開始せられた。海水の退却即ち湾頭干潟の退却に伴ひて、其両側の丘陵面上には各時代の干潟に相当する貝塚が順に並んで生じた」(東木1926b)と解説されたのである。全貝塚の位置を落とした地図とそれを基に過去の海を描いた旧海岸線の地図がその成果物であるが、時期や淡鹹度の異なる全貝塚が一括されているなど、当時の研究レベルに制約された無理や限界があった訳であるが、その後、この研究は標高10m海進説と解釈されて定説化していく。

貝塚が今の海とは遠く離れて内陸にあることについては、その後に土地の隆起があったと説明されてき

た。Morse も大森貝塚と東京湾との関係についてこのように説明している。これを谷に置き換えれば、谷奥に達していた海が時間の経過とともに谷口まで後退したという理解が生まれる。1894年に八木柴三郎・下村三四吉が、貝塚の谷における位置と貝種の検討により大森式と陸平式の土器の年代差を求めた（八木・下村 1894）のはその先駆的な試みであった。また東木も「同一渓谷に伴ふ貝塚の中、丘陵貝塚では上流方面が旧で下流方面が新であり、丘陵貝塚と谷底貝塚では前者が旧で後者が新である」（東木 1926b）と述べていた。この貝塚の所在する谷の位置に主体貝の淡鹹度の違いを加味して海岸線や貝塚の時間差を検討する研究法は、1926年に発掘された埼玉県さいたま市真福寺貝塚の報告の際に大官台地岩棚支台の貝塚で検討され（甲野 1928）、更に 1927年からはじまる大山史前学研究所による東京湾水系諸貝塚の組織的発掘で採用された。その中間報告（大山ほか 1933）は発表されたけれども、総括報告は未刊に終わる。山内清男による土器編年の確立が、層位学・型式学に依らない土器編年の確立を目指したこの事業の継続を萎ませることになった理由の一つになったと思われる。

1956年に千葉県北部の印旛沼に流れる鹿島川流域に属す後期のハマグリ主体の千葉市若葉区野呂山田貝塚を発掘した川戸彰は、報告で下流域の後期貝塚はヤマトシジミを主体とするのに、上流の野呂山田貝塚まで海進現象を想定する従来型の解釈に疑問をもち、鹹水産貝類の採貝地は谷の下流には求められず、分水界を越えた東京湾に流れる都川渓谷に求めたものと推察した（川戸 1961）。この水系を異にした海から貝を得ていたという考説は、鹿島川谷に属す野呂山田貝塚から都川谷までは僅か 700 mという近さでしかないとはいえ、それまでの貝塚麓下の谷は海という常識的理解に囚われない画期的なものであった。それにも拘わらず、野呂山田貝塚より 15 km以上鹿島川を下った位置にある四街道市千代田遺跡の調査報告を総括した八幡一郎は、「IV区 5号住居址（安行1式期）がハマグリ、P-4号小竪穴（加曾利B2式期）がイボキサゴを最多とする覆土貝層をもっていたことから、「少なくとも縄文時代後期には印旛沼を通して鹿島川の谷を 6 kmも溯った物井地区的台下まで潮が及んでいたことは確かである」（八幡 1972）と、印旛水系における貝塚の貝種組成の時間的な推移を調べずに「常識的に判断」⁽¹⁾していたのであった。

このような下流部に汽水域がありながら、その上流部なのに鹹水系貝塚がつくられるという逆転現象を示す貝塚は、1958年の船橋市金堀台貝塚、1960年の四街道市前広貝塚、1969年の船橋市海老ヶ作貝塚など印旛水系上流域の各地で確認され、それらは東京湾側の海岸から分水界を越えて海の貝が運ばれたものと考えられるようになった。とりわけオキアサリという東京湾の船橋一稲毛間の後期貝塚に特徴的な貝種が、千代田遺跡⁽²⁾や金堀台貝塚では多量に存在し、中期の海老ヶ作貝塚でも混在している事実は、決定的ともいえる物証である。

これは、従来の貝塚といふ人間活動の痕跡で自然の一部である海を復原する方法の危うさを明確に示したものであり、運搬といふ人間の活動を考慮外とした点に問題があったことを物語る。貝塚は「人間がつくったものである」ことを忘れて「当時の海岸線を想定したり、汀線の移動を即決したりすることは、はなはだ危険」（直良 1965）だということである。従って、貝塚から可能な海の検討は、流域全体の貝塚の時期別の貝種の変遷によって海の大凡の位置を「近似的に把握する」（遠藤 1979）ことはできても、具体的には貝殻や珪藻分析など、飽くまでも自然科学的に復原すべきなのである。

「縄文時代の海面上昇は、現在の海面より 10 m以上の上昇があったものとみられる」（江坂 1965）という理解は、永らく考古学界の定説であった⁽³⁾。谷の奥にまで貝塚が分布している状況から「当時の海の汀線が現在の標高十メートルの辺まで達して居たことが推測出来る」（八幡・和島 1941）という「現在の標高

2018年3月

「十米の辺」が、考古学研究者の間では何時しか「現在の」と「辺」が欠落し、「標高十米」と曲解して行ったのである。しかし、標高6mの砂丘上に立地する前期後半の茨城県神栖市奥野谷貝塚が、10m海進説とは矛盾する事実に疑問を抱いていた和島誠一は、従前の研究の方法的反省を日本考古学協会総会で発表（和島1965）し、自然科学家と共に海進の最高水準を確かめるため、模式地である関東平野で海進最盛期と考えられている縄文前期の貝塚の発掘と隣接する沖積地のボーリング調査と土壤・珪藻分析を1964-66年度に行った。その結果、海成層頂面高度は0~3.5mの間であり、10mは根拠が無いという結論を得た（和島ほか1968）のである。それまで標高10m未満の貝塚の存在は指摘されてはいたが、漸くその究明を目指す組織的な研究体制の編制が実現し、解明できたのであった。さすがに江坂輝弥も、「10年ぐらい前までは水位が10m近く上昇したと考えられたが、（略）水位の上昇限度は5m以下であったと考えられるようになった」（江坂1971）と改めた。

但し、この何時の間にか東木が提唱したとされていた10m海進説については、「東木は河流の堆積作用による見かけの海退を問題にしているくらいだから、標高10mをもって定められた地形的旧海岸線の高さは海拔10m以下であるという認識があったと見るのが当然であろう。東木論文の主旨は陸地の沈降とともに海水の侵入によってできた割れ谷の海域が貝塚分布極限と一般に一致することから、貝塚成立時代（東木はきわめて近い過去といっている）の旧海岸線を決定することであって、その時代の海面高度を問題にしたものではない。したがってこの論文から東木が10m説を唱えたとは読み取れない。縄文海進の最高海水準10m説は東木論文の誤解から生じたものではあるまい」（阪口・谷村1988）という論評が曾て加えられていたことを、ここに改めて記録しておきたい。

（5）海進・海退論と千葉市の貝塚

Morse以来、貝塚の傍にあった海は、その後の土地の隆起によって現在の位置まで後退したという一方的海退で理解されてきたが、考古学界で海進の存在を指摘したのは、三森定男が1941年に「海侵・後退」（三森1941）という言葉を用いたのが古い。この直後、海退の前に海進が存在したことを貝塚の時期に絡めて具体的に論じたのが酒詰仲男（酒詰1942）と江坂輝弥（江坂1943）である。これは土器編年の確立や貝塚の分布調査と発掘の進捗による歳度判定の増加により可能となった研究の成果であり、酒詰は諸磯式期、江坂は関山式～諸磯式期とした。貝塚研究を通して前期に海進のピークがあったことを提唱したもので、両者共に海進海退のメカニズムを地盤の沈降と隆起という旧来の地殻変動で説明していたが、既に日本でも紹介されていた氷河性海面変動という研究の存在を考古学研究者は未だ知らなかつことになる。やがて1952年にINQUA日本支部結成という日本第四紀学の研究団体が発足する。これにより考古学研究者は自然科学家と活発に交流し、連携を図って共同研究を進めるなど、研究を取り巻く状況は大きな転機を迎えることになる（日本第四紀学会1986）。

加曾利貝塚の属す千葉市を貢流する都川水系の貝塚と海の関係については、武田宗久（武田1953）・岡田茂弘（岡田1954）・伊藤和夫（伊藤1958・1959b）が1950年代に相次いで検討を加えていた。例えば伊藤和夫は、都川谷最奥に位置する誉田高田貝塚（標高48m、谷標高37m）は、半月状の大きな主貝塚なので「当然、この辺り迄、最盛期には海が浸入したものと考えねばならない」と解釈し、それではその下流域に位置する同期の矢作貝塚（標高27m）や押元貝塚（標高16m）が海水に覆われてしまうため、「当

然、先史時代以降の地盤運動に起因するものに外ならない」(伊藤 1958)とした。それより前に発表された武田や岡田の論も相似した内容であり、三者に共通するのは、貝塚直下の谷に海水が流入していたことを前提とし、下流域にある標高の低い貝塚が水没してしまう矛盾の解消を関東造盆地運動という地盤変動に求めて合理化を図ったことである。唯一人、岡田は「氷河の融氷に伴った汎世界的な海水の増加による海進」を考慮したものの、「影響が少ない」(岡田 1954)と判断していたが、武田と伊藤はそれを一顧だにせず、関東造盆地運動に起因する土地の沈降・隆起を重視していた。それは、とりわけ千葉市南部の貝塚が、北部の貝塚と比べて異常に標高が高く、それも谷の奥に位置する主軸の規模の大きな貝塚であったことに頭を悩ませた苦肉の解決案であったと思われる。即ち、三者共に氷床の凝固・融解に起因する海面の下降・上昇という氷河性海面変動では説明できない、一様ではない局地的な地盤変動という特殊事情をそこに見たのであった。或いは、「堆積作用による湾底の陸化の途中に於いて、関東低地の傾斜運動のために、湾底の逆行即ち海水の侵入が、幾度か起つたことは想像に難くない」(東木 1926b)という指摘に影響されたのかもしれない。

この関東造盆地運動という地盤変動の影響は千葉市ではどれ程なのかという点に関しては、貝塚爽平・杉原重夫が検討を試みている(貝塚・杉原 1976)。勿論、ここでは縄文海進最盛期以後が問題となる。まず千葉市付近の関東造盆地運動の過去5千年間の影響を、 y (汀線高度) = a (海面変動) + $1/18 z$ (下末吉面の高度)という式にした。 y はボーリング地点1(若葉区加曾利町南西部の和田新道バス停東方)の貝塚を含むシルトの上面が3.3 mであったことから、都川谷の海進のピーク時の海面を4 mと推定した。 $1/18$ は、縄文海進のピークを5千年前とし、これを下末吉海進のピークを9万年前とみて割ったもの、 z は台地高度25 mから関東ローム層の厚さ5 mを引いた20 mである。その結果、 $a = 4 - 1/18 \times 20 = 2.9$ となり、 a の海面変動が2.9 mの増加と計算された。これを用いて計算すると、加曾利付近では $y = 2.9 + 1/18 \times 25 = 4.29$ なので海面の4 mより0.29 mの増加、台地面高度が菅田高田貝塚を想定した標高50 mとしても、 $y = 2.9 + 1/18 \times (50 - 5) = 5.4$ なので1.4 mの増加にすぎないことが分かり、「この値は伊藤和夫の推定よりはるかに小さい」と結論された。千葉市付近の縄文時代後半の海に觸れる関東造盆地運動の影響は、軽微なものであったことになる。

加曾利貝塚東側の坂月川谷について、「往旧は此の辺まで海水入たるも」(上羽 1915)、「この附近すべて瀬海の地たりしならんとは、何人も肯定するところなれ共」(小田桐 1915)、「海水を湛えた湾であり」(史前学会 1936)などと説明されてきたのであるが、勿論根拠のあるものではなかった。今でも貝塚の下に当時の海が来ていたと思っている人も多いから、いかにも多くの人に根強く信じられてきた常識的理解であったかが分かる。ましてや貝塚が海と離れた位置にあり、個々の貝塚で海との距離が違っていたと想定することなどは思いもよらぬことであった。

加曾利貝塚調査団による地形調査で北貝塚から坂月川谷までを横断するボーリングが行われ、その成果が速報として1966年に紹介された(杉原 1966)。標高約16.5 mの谷底の地点B8は、柱状図の概算ではあるが、上から黒泥土・砂・泥炭土という沖積層が約3.5 m続いて洪積層(沖積層基底約13.0 m)になっていた。そこで注目されるのは、「われわれが意外としたことは海成の砂層が全然ないこと」という指摘であり、これは貝塚直下の谷まで海が来ていなかつたことを明らかにした千葉県で最初の報告となった。加曾利貝塚東の坂月川谷のボーリングはこれ以外にも実施されており、例えば地点Aは現標高約15.5 mで沖積層基底は約12.5 m(貝塚・阿久津・杉原・森脇 1979)、地点K Iは現標高約17.0 mで沖積層基底

2018年3月

は約13.0m（田原・中村1977）であった。これらのボーリング地点の標高は概数ではあるが、最終氷期の谷底標高は約12.5～13m前後であって、そこでは完新世の海成砂層や貝塚といった海の証拠は何も見つかなかったのである。

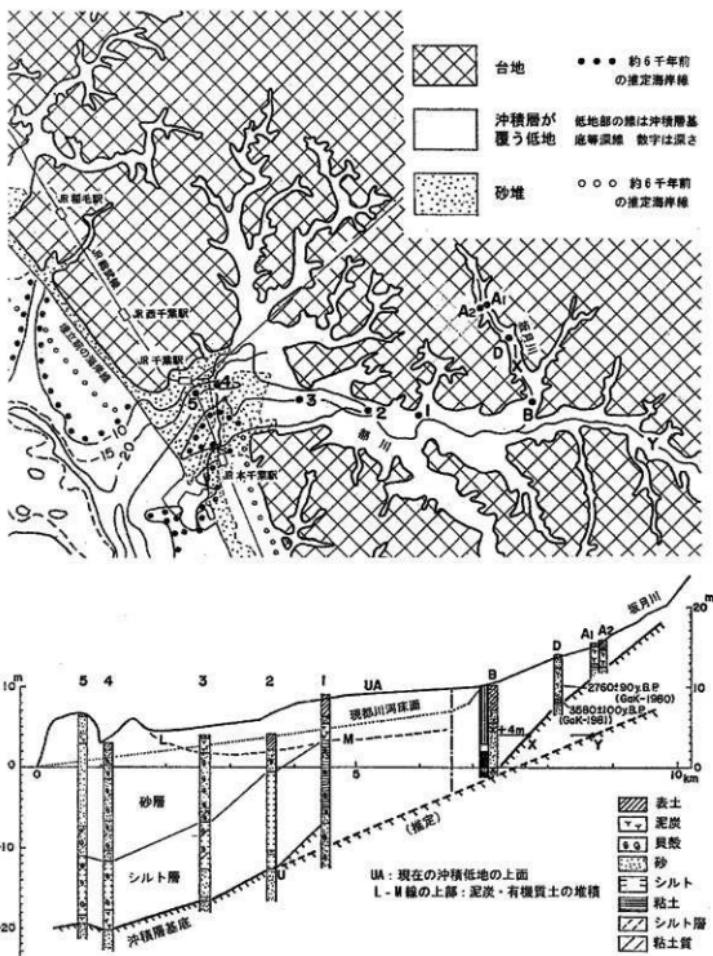
この加曾利貝塚麓下の谷が海であった証拠は無いという杉原莊介の指摘に対し、武田は「より広範囲な試錐を行い、その結果を総合して、慎重に判断を下すべきものと思う」と疑義を呈し、「有楽町層堆積以降の、千葉市付近の沈降量が、千年につき1メートル強であったとすれば、(略)海進の最盛期には、少なくとも、標高10メートル強のところに、海岸線があったものと推定される」として、堀之内式期の貝塚が各河川の谷奥まで分布し、しかも緯度が高いことを例示し、これを「海進の最盛期が中期にあり、後期前半の堀之内式のころまでは、海面がそのまま停滞していたことを立証する他の側面である」（武田1974）と、依然として造盆地運動に拘った意見を述べていた。しかしながら、ようやく武田が海と縄文時代の貝塚の関係を海面の上昇と下降で論じるようになったのは、1986年に行われた加曾利貝塚博物館開館20周年記念特別講座の講演からである（武田1988）。

このように、関東造盆地運動という地殻変動は、貝塚と海の関係に左程の影響を与えてはいないらしいことが分かったのであるが、問題の解決は直接沖積層から証拠を得ることに尽きる。都川水系におけるこの点に関する研究は、本流の都川谷はすべて既存のボーリング試料が、支流の坂月川（報告では古山川と仮称していた）谷はハンドオーガによるボーリング試料が用いられて検討され、1970年代後半に報告された（貝塚・杉原1976、貝塚・阿久津・杉原・森脇1979）（第1図）。先記のボーリング地点1の海成層の上面が3.3mであり、都川谷の海進ピーク時の海面高度は4mと推定されたので、これと復元した沖積層基底高度の交点を求めるとき、都川谷では地点Y（若葉区北谷津町・多部田町が接する北谷津入口バス停近く）、坂月川谷では地点X（若葉区加曾利町・小倉町の境界南部）になるという。つまり、海進ピーク時ですら海の影響は最大で加曾利南貝塚東麓下の岬状突出部からは1km以上も下流まであり、貝塚形成期の海は更に下流に行かねばならなかつことになる。

坂月川谷が都川谷に接続する出口部の標高約10mの地点B（若葉区加曾利町・坂月町・太田町の境界付近）では深度11.5mまでボーリングされ（貝塚・阿久津・杉原・森脇1979）、深度10.7m（標高約-0.7m）で沖積層基底になっていた。そこでは珪藻分析も実施され、海水棲種が含まれていた冲積層は深度8～10m（標高約2～0m）の層準であったが、その珪藻は淡水棲種が中心で海水棲種は少なく、「海水の遡上しうる地域の河川の堆積層と考えられる」と想定され、海の到達は否定的であった。

次に坂月川谷中流域の地点D（若葉区加曾利町・小倉町の境界北部）は、加曾利貝塚の岬状突出部から約500m下流に位置しており、標高は約14mでボーリングが沖積層基底の深度7m強まで行われている。ここでは年代測定が実施され、沖積層基底より約75cm上の深度6.45m木片は $3,580 \pm 100$ y.B.P.、また深度4.15mの上位の木片は $2,760 \pm 90$ y.B.P.という結果が得られた（貝塚・阿久津・杉原・森脇1979、杉原1993）。下位の年代は泥炭層形成の初期に相当するため、坂月川中流域における泥炭層形成は縄文時代後期以後にはじまつたことが明らかとなったのである。

加曾利北貝塚東方低地において1976年に田原豊が実施したボーリング地点K I（現標高約17.0m、沖積層基底約13.0m）（田原・中村1977）では、厚さが約2.1mある泥炭層上端の標高約15.0mは $1,430 \pm 85$ y.B.P.、泥炭層下端から約30cm上位の標高約13.3mは $2,890 \pm 75$ y.B.P.であった。堆積速度が一定であったと仮定すると、加曾利北貝塚東方低地での泥炭層形成は縄文時代後期末頃にはじまり、そ



第1図 上：千葉付近の地形分類と沖積層の基底地形 下：都川低地の沖積層断面図

(貝塚・杉原 1979 に加除) ボーリング地点: 1. 加曾利町西部 2. 都町南部 3. 都町2丁目南部
西部 4. 荣町西部 5. 富上見1丁目西部 A. 加曾利貝塚東方 D. 小櫻橋付近 X. 県立桜が丘
特別支援学校東方 B. 遊田前橋付近 Y. 北谷津バス停付近 ※加曾利貝塚はA₂文字の下

2018年3月

れ以前の谷底の河川敷は砂原であったということになる。

都川谷のボーリング地点4（中央区栄町西部）付近は、千葉市立郷土博物館のある亥鼻の麓から北に延びる砂州と、登戸の麓から南に延びる砂州の間の都川・葭川の流路である。沖積層の基底は約20mであるから、これを海面変化曲線に当てはめると、ここに海が到達したのは約8千年前となる。ボーリング地点5（JR千葉駅前の中央区富士見1丁目西部）は、貝殻包含の有無から下半分は海成層、上半分は陸成層と考えられ、最終的に標高6m以上もの砂の高まりになっており、都川の河口を塞ぐように発達した砂州の上を覆った砂丘と考えられる。更に注目されるのは、ボーリング地点2～4では、貝殻を含む砂の層が標高2～1mまで認められていることである。これを遠藤邦彦作成の海面変化曲線（遠藤ほか1999）に照らすと、標高2～0m辺りの海面は約4,700～3,400千年前と想定されている。これは加曾利貝塚をはじめとする千葉市に多い縄文時代中期中葉から後期中葉までの貝塚の年代に比定される。とすれば、ボーリング地点2の都町南部（立会橋付近）、ボーリング地点3の都町2丁目南西部（東金街道の旭町バス停近く）、ボーリング地点4の栄町などが、都川水系の縄文人が盛んに採貝していた干潟であったと想定されることになるが、確実な結論については古環境復原を目的とする本格的な調査の実施による解決が待たれる。

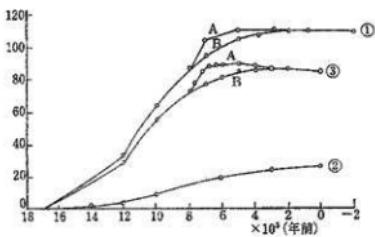
一方、南部の市原市境の村田川低地周辺では、1970年代の千葉市東南部地区土地区画整理事業に伴って多数の地質ボーリングコアが得られ、これを分析した松島義章により貝塚と採貝地の関係が明らかにされた（松島1979・1980など）。貝化石を含む海成層は、マガキ・ハイガイで特徴づけられる下部の砂質シルト層と、その上を覆うイボキサゴ・シオフキなどからなる細砂層からなり、前者は海進最盛期に、後者は海進最盛期以後の堆積に比定された。この砂質シルト層と細砂層の分布に基づいて海岸線と海域の描かれた古地理図が2枚作成され、当時は海進最盛期頃の貝塚情報を欠いていたが、海進最盛期以後については海域の貝類組成と周辺の貝塚の貝類組成とが一致することから、貝塚と採貝地の関係が明らかにされた。これにより、例えば後期前葉の千葉市緑区木戸作貝塚の場合、谷を約1km下った谷の出口付近に採貝地が想定された。但し、細砂層時代の海そのものにも時間的変化があるから、約1km下流の採貝地は陸側の上限ということになり、現地性の高い貝殻の年代測定などにより海岸線の変化を追っていく細かな研究が待たれる。「いままでに貝塚と貝類採取領域の問題について詳しく論じた研究がないのは、貝塚周辺の沖積層の調査が全くおこなわれていなかったことによるのであろう」（松島・小池1979）という指摘は、今日でも尚全国共通の懸案であり続いている。

都川水系の貝塚と海の関係に関する1950年代の相次いだ検討は、縄文人の行動を遺跡の立地する水系にのみ制約し、かつ貝塚崖下の谷まで海が浸入していた仮定を前提とし、海面標高の矛盾は関東造盆地運動の局地的な傾斜運動で解決しようと目論んだ点に根本的な問題があった。武田宗久が都川上流の菅田高田貝塚を「むしろ浜野川や村田川の沿岸海域に搬入路がある可能性が高い」（武田1990）と、水系や地盤変動に拘らない貝塚理解に到達したのは、『千葉市誌』から37年後のことであった。

湊正雄は、沖積世はじめの海進は非常に暖かな気候による世界的な規模の融氷による海面上昇によるもので、海面低下は気候が今の状態に近づくにつれて氷床が大きくなり、海面が下がっていたもの（湊1954）としていた。その直後、杉村新は東京下町の沖積層を検討し、B面（陸上の川の侵食による沖積層基底面）→A面（沖積層上面）→現海面への推移を、B面→A面の海進は世界的現象であり、海面上昇は氷河の融氷によるアトランティック海進にほかならず、その後のA面→現海面の海退は日本中に見られる現象で、原因は未だ良く分かっていないが、下降量は僅かなので「氷河に直接関係しない海面変化である

可能性がある」(杉村 1956) と述べ、早くも海退の原因を結氷とは見ていなかった。多田文男は、海進の原因については、1) 地殻運動の結果としての陸地の沈降、2) 気候の温暖化に伴う海面の上昇の2つ、海退の原因については、1) 地殻運動の結果としての陸地の沈降、2) 気候の冷涼化に伴う海面の下降、3) 河川の運搬してきた土砂の堆積の3つが考えられるとして検討を行い、海進については2)の気候の温暖化、海退については2) 気候の冷涼化を原因と考えた(多田 1964)。考古学の世界でも、海進は気候の温暖化による海面の上昇、海退は気候の寒冷化による海面の下降であると、今でも海進・海退は気候の変動と結びつけて説明されるのが普通である。ところが、地球の海水量は現在の方が多い、約7千年前の海水量は現在と同じか若しくはむしろ少なかったことが指摘された(横山 2007)⁽⁴⁾ ことで、海退は気候変動によるという解釈は却下されたのである。

日本列島は最終氷期の旧氷床域やその周辺域(near-field)とは十分に遠く離れた遠隔域(far-field)であるため、融氷による海水の増加が地殻を押すhydro-isostasy(海水荷重地殻均衡)が優勢である。そこでは増加した海水の荷重が海洋底を押して沈降させ、海に近い陸地を隆起させたけれども、陸地の隆起が海面上昇よりも遅れたため、約6~7千年前の海面の痕跡がその後の隆起により陸上に持ち上げられ、貝塚も位置は変わらないが標高が高くなり、海岸線が後退していったのである。日本の海面変化曲線で6千年前の前後⁽⁵⁾に現海面より高いとするFairbridge曲線が多い(杉村 1979、中田 1980など)のはこのためなのである。また杉村新(杉村 1979)は、Cathlesが1975年に発表した融氷水の量から計算した海水量変化曲線①、ハイドロアイソスタシーによる海水の荷重による海底の沈降変化曲線②、それらを合成した海面変化曲線(=海水量変化曲線-沈降変化曲線)③のグラフ(第2図)を紹介し、融氷水の量を忠実に辿ったAの海面変化曲線に注目していた⁽⁶⁾。この曲線こそ、高海面地域である日本の海面変化曲線が計算によって見事に再現され、証明されたものであったのである。



第2図 Cathleの海面変化曲線(杉村 1975)

(6) 千葉市の大規模貝塚

第3表は、千葉市域の貝塚を扱った各種地名表から、「大」「環状大」「環堤」「馬蹄形」「環状」という特記のある貝塚を選び出して一覧にしたものである。千葉市としての地名表は、後藤和民による1970年発表の地名表(後藤 1970)を基本にして修正が加えられて行ったと思われるが、遺跡の異同と評価に混乱が多い。後藤の馬蹄形又は環状貝塚の当初の定義は、「中央広場」と呼ばれる空白部を中心にして、厚さ2~3mに及ぶ大規模な貝の堆積が、直径100~200mにわたって、円形または弧状に分布する大型貝塚(後藤 1973)というものであったが、実はこの厳しい基準をクリアする貝塚はその中には一つも無く、1980年には厚さを1m以上に引き下げた(後藤 1980)。この下げた基準を満たすと思われるものを大規模貝塚とし、未満の弧状・馬蹄形・点列貝塚を中規模貝塚として見直したのが表右端の行である。もとより連続的に並ぶであろう貝塚を、そこで分離する基準に客観的根拠は無いが、大小違いの著しい馬蹄形貝塚を十把一絡げに扱うのは問題が多く、且つ体積での積算は無理であるから、体積以外の評価の基準となる

2018年3月

文献名	伊藤 地名表 1959a	酒詰 地名表 1959	後藤 駿史 27 1970	後藤 通 史 編 1974	加博編 史料編 1976	史跡整 備中間 1981★	貝塚詳 細分布 1983	史跡整 備基本 1985★	県文七 紀要 19 1999	規 模
貝塚名				馬蹄形						
武石				馬蹄形						
長作築地・築地				馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		△
横橋	大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		○
谷津台						馬蹄形				
圓生	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		○
西寺山・源町・廿五里北			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形					△
扇台			馬蹄形	馬蹄形			馬蹄形	馬蹄形		△
東寺山			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		△
廿五里南			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		△
草刈堀	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		○
荒屋敷	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		○
荒屋敷西	大		馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		
台門	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形			馬蹄形			○
花輪			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		馬蹄形	馬蹄形		△
加曾利	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		○
坂月台			馬蹄形	馬蹄形						△
荒立				馬蹄形	馬蹄形		馬蹄形			△
野呂奥新田・野呂山田			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形					△
八反目台								馬蹄形		△
川井										△
多部田	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	環状	馬蹄形	馬蹄形		○
押元			馬蹄形	馬蹄形			馬蹄形	馬蹄形		△
上坂尾・大久保	大		馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形					—
辺田ノ台・へたの台	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形						△
月之木・月の木	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	環状	馬蹄形	馬蹄形		○
矢作	大		馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		馬蹄形	馬蹄形		○
亥鼻			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		馬蹄形	馬蹄形		
南生実台・森台			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		△
上赤冢	環状大		馬蹄形	馬蹄形			馬蹄形	馬蹄形		△
菅田高田	環状大		馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		馬蹄形	馬蹄形		△
篠地台	環状大		馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		馬蹄形	馬蹄形		○
長谷部・主理台	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		馬蹄形	馬蹄形		○
高有・菱名				馬蹄形	馬蹄形		馬蹄形	馬蹄形		△
日照田・有吉北										○
有吉・有吉宮前・有吉南	大		馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		△
椎名崎・木戸作										△
小金沢							環状	馬蹄形		△
六通	環状大	環堤	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形		△
大勝野北・大勝野			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形					—
大勝野・長堀・大勝野南			馬蹄形	馬蹄形	馬蹄形			馬蹄形		△
鷺谷津				馬蹄形						
千葉市内	13	11	27	33	29	16	26	25	30	12
千葉市内(東京湾水系)	13	11	26	31	27	16	25	24	30	12

第3表 千葉市の貝塚地名表にみる掲出馬蹄形・環状貝塚の推移 ○: 大規模 △: 中規模 —: 併合

無印: 除外 ※谷津台・荒屋敷西は前期。上坂尾は押元と、大勝野北は大勝野南と同じ遺跡とし、加曾利貝塚は1か所とした。

式石・鷺谷津は绳文時代の貝塚なのか不明。★は主要遺跡としているため掲載は不完全となっている。

一定の数値を設けその違いを検討するしかないであろう。この基準を適応すると、千葉市内の貝塚（第3図-1・2）の内、大規模貝塚は12か所となる。これは千葉県文化財センター1999で集成された市内の馬蹄形貝塚30か所の内の40%に相当する。また古内茂は、千葉県教育委員会1983と千葉県文化財センター1999で集成された馬蹄形貝塚を千葉県全体で拾い上げ、96か所⁽⁷⁾を大規模貝塚として一覧表（古内2007）にしたが、このうち奥東京湾～東京湾水系に立地する貝塚を数えると84か所になる。これを径100m以上厚さ1m以上という基準で見直すと、可能性の高い推定を含めるが、他地区の大規模貝塚は、市川市堀之内（岡本1957）・曾谷（堀越2000）・姥山（堀越2000）の3貝塚、船橋市古作貝塚（八木1893）、市原市門前（無名姓1911、柴田1911）・西広（鶴岡ほか2007）・山倉天王＝堂谷（忍澤1994、市原市埋蔵文化財調査センター編2008）の3貝塚、木更津市祇園貝塚（柿沼ほか1970）の計8か所が追加される位で、奥東京湾～東京湾水系全体では総計20か所しかないことになる。つまり、貝塚の大多数は中・小規模のものであり、とりわけ大規模貝塚については千葉市に集中していることが指摘できる。

その大規模貝塚を主体となる貝層の外形の長さで比較すると、加曾利貝塚は北貝塚160m×約140m、南貝塚約190m×約150m、市川市曾谷貝塚は約240m×約210m、市川市堀之内貝塚は約210m×約110m、千葉市横濱貝塚は約200m×約170m、市原市山倉天王＝堂谷貝塚は北の堂谷貝塚約110m×約100m、南の山倉天王貝塚約140m×約100mが大所となっている。

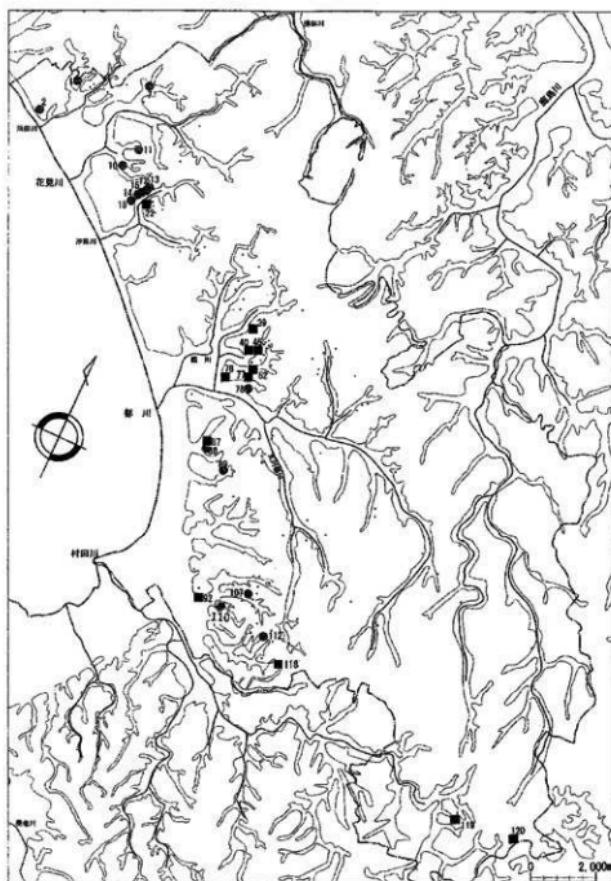
大規模貝塚の貝殻の主要な堆積場所でみると、台地上面と台地の縁から斜面にあるものに分けられる。台地上面上よりも斜面を主とすると言える貝塚は、市川市堀之内貝塚、千葉市有吉北貝塚（小笠原編1998）、市原市門前貝塚・西広貝塚・山倉天王＝堂谷貝塚の5貝塚あるけれども、東京湾沿岸では台地上面にある方が15貝塚と多い。これはこの地域の特色である。次に貝塚の主たる形成時期別にみると、中期型のものは千葉市荒星敷貝塚（西山1974）・月之木貝塚（武田1953）・有吉北貝塚の3貝塚、中期・後期型のものは市川市姥山貝塚、千葉市加曾利貝塚・主理台（長谷部）貝塚（古内2000）、市原市西広貝塚・山倉天王＝堂谷貝塚、木更津市祇園貝塚の6貝塚で、残り11貝塚が後期型である。2型に纏めると、中期型には9貝塚、後期型には17貝塚が属し、後期になって大規模貝塚が倍増・拡散するという特徴が指摘できる。地的には市川市・船橋市の国分・大柏川流域4貝塚、千葉市の花見川流域1貝塚、沙田川流域1貝塚、都川・葭川流域9貝塚、村田川流域1貝塚、市原市の市原低地1貝塚、養老川流域2貝塚、木更津市の小櫃川流域1貝塚となっていて、都川・葭川流域を中心とする千葉市周辺に大規模貝塚が集中していることが浮き彫りになる。これは、中期中葉から後期中葉にかけて、千葉市周辺の貝の生産性が如何に高かったということを雄弁に物語っている。このことは、実は120年以上も前に「独り此地方に限り貝塚の極めて大にして且多きものは抑如何なる理由ありて然るか」と提議し、その理由を広大で肥沃な海岸がつくられてアサリ・ハマグリ等の貝が多産していた（山崎1893）と山崎直方が考察していたところである。分けても坪井正五郎が、「彼れ程広い貝塚は他に類を求める事がむつかしいと申して宜しい」（坪井1907b）と評価していた加曾利貝塚は、希少な存在の大規模貝塚中の最大の大規模貝塚として位置づけられ、その存在が際立っていると言える。

2. 貝塚ゴミ捨て場説について⁽⁸⁾

後に貝塚研究の第一人者となる酒詰（土岐）仲男は、考古学研究を志して東京渋谷にあった大山史前学研究所を訪ねた1934年に、早くも「貝塚」という用語について次のような意見を述べていた。デンマー

2018年3月

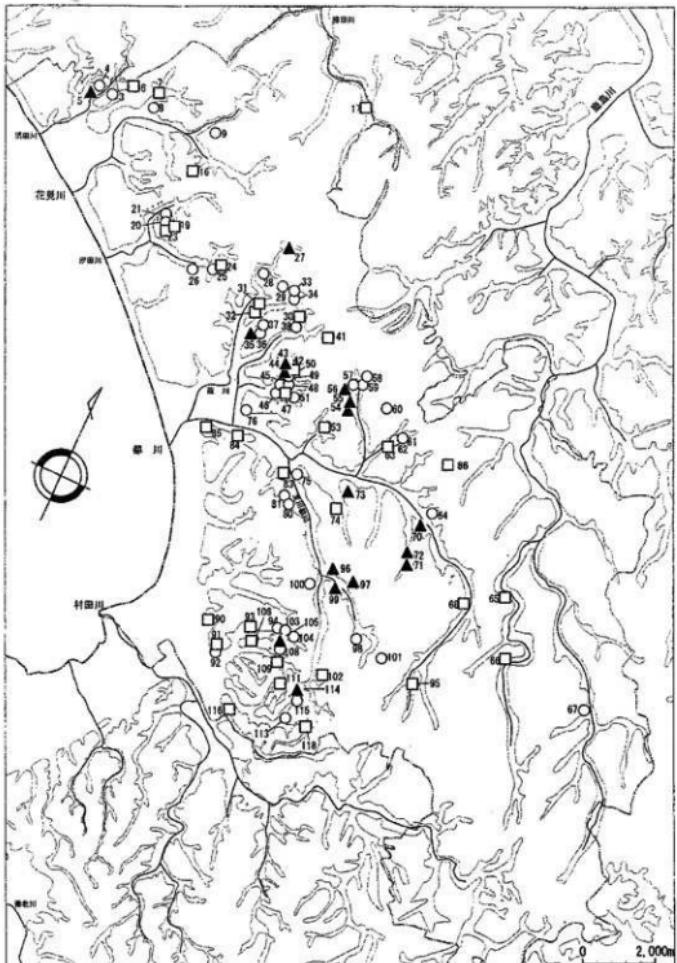
1. 清水作
2. 宮ノ台（大道）
7. 長作城山
10. 鶴牧
11. 植野
12. 烏込東
13. 烏喰台
14. 烏込西
15. 烏込
18. エゴタ
22. 谷津台
39. 宮腰
44. 向ノ内
50. 貝塚後
52. 車坂
76. 宝塔寺台
(西ノ下通)
77. 木戸場
78. 向ノ台
87. 稲荷山
88. 驚谷津
89. オクマンノ（大北）
92. 神門
107. 有吉城
110. 伯父名台
112. 小金沢古墳群
118. 大膳野南
119. 東台
120. 民ヶ台



第3図-1 千葉市内の貝塚分布（早期・前期）（湖口2011を改編）●早期 ■前期

ク語・ドイツ語・フランス語・英語の「貝塚」には、これを芥拾場と見る名称と、貝の集積と見る名称と二系統ある訳である。ところで、日本語の方には、「貝塚（介塚とも記す）、貝塙（介塙とも記す）」或は稀に貝場等と云ふ位で、芥拾場の意味に相当する名称が欠けてゐる」と指摘し、「貝塚は何と云つてもモールス氏等が盛んに用ひたであらう Shell mound の直訳に相違なく、Mound = 塚と云ふ意味が、考へ方によつてはひどく邪魔になる」と“塚”に拘り、「貝塙と云ふ方が、まだ少しましな様に思はれる」（上岐1934）

3. 東谷津
4. 奈良熊
5. 奈良熊南（武石）
6. 篠地
8. 川辺田（要検討）
9. 馬場塚
16. 養橋
17. 内野第1
19. 東ノト東
20. 小中台
21. 牛尾舛
23. 東ノ上西
24. 園生
25. 向原
26. 囲生新山
27. 重牛
28. 保ヶ崎
29. すすき山
30. 三甲里北
31. 駿台
32. 駿台前
33. 百守山
34. 北原原
35. 海老
36. 稲毛台東
37. 東寺山
38. 廿五里
41. 北原
42. 草刈場北
43. 草刈場
44. 向ノ内
45. 草屋敷西
46. 干場
47. 台門
48. 草屋敷
49. 水辺田（荒屋敷北）
50. 口設後
51. 鮎ヶ作（殿山）
53. 花輪
54. 加曾利南
55. 加曾利北
56. 加曾利西
57. 京駿台
58. 広ヶ作
59. 遊橋
60. 中堆
61. 鹿立
62. さら坊
63. 台さら坊
64. 北谷津上ノ台
65. 野呂山田
66. 八反日吉
67. 中野僧御墓
68. 川井
69. 富ノ前
70. 台ノ坊
71. 多部田
72. うならすず
73. 薩ノ谷
74. 押元
75. 城之瓶
76. 宝勝寺古（西ノ下通）
80. へたの台
81. 月ノ木
83. 高崎台
84. 矢作
85. 支鼻
86. 荒立
90. 大寳寺塚
91. 森台
92. 神門
93. 上小塚
94. 南二重塚
95. 登田高田
96. 台妻
97. 菊地台
98. 長谷部
99. 台塚
100. 蓬名
101. 東水砂第2
102. 小谷
103. 錦取台
104. 錦取
105. 有古北
106. 大井戸作
108. 有古南
109. 木戸作
111. 小金沢
113. 鶴塚台
114. 六通
115. 六通金山
116. 杉ノ台
118. 大膳野南



第3図-2 千葉市内の貝塚分布（中期・後期）（湖口 2011 を改編）○中期 □後期 ▲中～後期

としていたことがある。なるほど“shell mounds”を直訳すれば「貝塚」であるが、Morse来日以前の江戸時代の下総国には貝塚村が10か村あったし、享保4年（1623）の『奥羽輿蹟聞老志』や文政7年（1824）の『新編武藏風土記稿』でも「貝塚」の文字が使われていたから、「貝塚」は“shell mounds”的訳語として使用されはじめたものではないし、考古学の専門用語として使用されはじめたものでもない。

またE.S.Morseが1879年7月刊の大森貝塚の英文報告書“SHELL MOUNDS OF OMORI”で使用した“shell mounds”を、訳者の矢田部良吉がその和文報告書で「介墟」と訳したもののが学術用語であるとする解説を時々見掛ける。「介墟」とは「貝類の丘」というような意味であるが、「介墟」の文字は大森貝塚関係文書のうち、『東京大学法理文学部第六年報』（1877年9月～1878年8月）に収録された「介墟発見ノ件」（1878年12月）で既に使用されていた（本間ほか2007）から、その文字の使用は1879年12月刊とされる矢田部の口訳になる和文報告書が最初ではないことになる。

大森貝塚英文報告書では、「ごみため」という意味の“the refuse piles”が3か所使われていた。この用語は和文報告書では「介墟」と「廃墟」と各1か所で訳され、残り1か所は訳されていない。一方、現代語訳（近藤・佐原編訳1983）ではすべて「ごみため」と訳されたが、別に3か所で他の語も「ごみため」と訳されていた。矢田部は逐語的に訳していないが、“the refuse piles” “shell mound” “mounds” “shell heaps” “shell deposits” “deposits”などの言葉を皆「介墟」ないし「墟」と訳していたから、“shell mounds”を「ごみため」と口訳したのは矢田部ではないことが分かる。矢田部は「芥捨場」の意味に相当する名称どころか、「塚」や「高まり」の言葉も使用していないかったのである。

一方、近藤義郎と佐原真による2種の現代語訳（近藤・佐原1977・1983）では、「ごみすて場」という表現は1か所、「ごみため」という表現は1977年版では4か所、1983年版では5か所使用していた。1983年版の当該箇所を英文報告書で当たると、「ごみすて場」は“the refuse piles”で、「ごみため」は“the refuse piles”的語が2か所、“refuse heaps”と“deposits”的語が各1か所で、残る1か所には該当する単語は無かった。Morseは歐州の二系統ある貝塚の名称と同様に、「貝塚を有する遺跡を表す名称」としては“shell mound”を、「堆積物を芥捨場として捉えるときの用語」としては“the refuse piles”を使い分け、これに“mounds” “shell heaps” “shell deposits” “deposits”などの言葉を適宜使用していたのであった。

これ以外の当時の状況を調べると、大森貝塚発掘中の『東京日々新聞』1877年10月8日付の記事では「小芥丘」、12月17日付の記事では「芥丘」の語が使われていた（本間ほか2007）。「芥丘」とは、直訳すると「台所ゴミの山」となる“the refuse piles”を記者が和訳した用語と思われるが、これは新聞記事の中だけで終わるものらしい。また1878年6月30日にMorseが浅草井生村櫻で講演した内容が『なまいいき新聞』第3～5号に連載されており、その中で、恐らく「貝塚」に相当する箇所を通訳の江木高遠は「貝の地中に漁集せる所」と訳していた（本間ほか2007）。以上からみると、当時は学術の世界も一般社会も「貝塚」にまつわる用語は全く定まっていなかった状況であるが、内容としては「ゴミ捨て場」と認識されはじめていたことが窺える。

Morseが帰国し、その教え子たちが本来の生物学の道を歩むことでMorse系の考古学研究の系譜は途絶える。これと入れ代わるかのように東京大学の学生を中心とした研究グループが「人類学会」を結成し、その中心人物である坪井正五郎は、1886年創刊の『人類学会報告』第1号に“人類学会”的略史を話した記録を掲載している。その中で「介墟」という語は「陸平介墟」と使用した1回だけで、これ以外は大森貝

塚を含め「貝塚」という語を使用し、混用していた。また同号末尾の「註解」欄では「貝塚」が採り上げられていて、その冒頭に「介墟トモ言フ」とある。

「介墟」の使用は、東京大学の大森貝塚関係文書が確認できる最初であることから、「介墟」は公文書作成のため官吏が行政用語として考案したもので、矢田部がこれを借用した可能性が高い。一方、「介墟」が廢れた確かな理由はどこにも書き記されてはいない。田澤金吾は「その後これを shell mound の字義通り貝塚と改められて一般化して今日に至っている。字義の上からは介墟の語の方が適切らしい点も少なくないが、貝塚の呼称は古くから各地の貝塚のある地名として用いられて居り、貝塚は貝戻塚などと呼ばれてゐるから、この名称が今日普遍化されたのも故あることである」(田澤 1935) と述べていた。「介墟」の使用が長続きしなかったのは、「介墟」という新造語は見るも聞くも如何にも難解で馴染み難く、対して「貝塚」はこれまで我国で一般に使われていた言葉であって分かり易く、考古学用語としての借用に何等不都合はないという認識が研究者間に広まり、共有化されたからなのであろう(堀越 2017)。

明治時代に執筆や各地の講演活動を活発に行っていた坪井正五郎は、「余ガ貝塚ト云フハ此類ノ掃キ溜メニテ貝殻ノ殊ニ多キ者ヲ指スナリ」(坪井 1886b) という貝塚=掃き溜め説を広めたと考えられる。また大正・昭和時代に執筆や各地の講演活動を盛んに行っていた鳥居龍藏も、「貝塚はデンマルクの言葉でクゼッケンメーデキングスと云ふ如く、もとゴミタメ・ハキダメ場で、即ち食物の不用残物を捨てた場所である」(鳥居 1928) という貝塚=ごみ溜め・掃き溜め説を広めたと考えられる。これらの研究情勢を受け、1930~40年代に考古学の普及を図って発行された多数の単行本や一般雑誌(佐藤 1930、田澤 1935、樋口 1939、八幡・和島 1941、三森 1941、直良 1942、大場 1943、甲野 1947、後藤 1947、酒詣 1948など)を見ると、悉くごみ溜め・ごみ捨て場・掃き溜め・廃物捨て場という解説をしており、貝塚=ゴミ捨て場説は違うことなき定説として定着して行ったのである。

しかしながら、八木樊三郎は「殊更或種の貝殻を下部に敷き詰めたる例があるが上に完全の遺品を多量に出す風往々に見ゆるを以て旧説に疑を挟むものも亦これ有り」(八木・中沢 1906) と指摘し、また坪井も「稀れには貝殻層中完全な土器を故らに埋めた様に見える所もありますが、何の故に彼様な事を仕たものか未だ詳できません。貝塚は元来何で有るかと云ふ事、又其場所は如何なる事に用ひられたかと云ふ事は実査の後で無ければ決して十分に考定する事は出来ません」(坪井 1907a)とも述べていた。これは、単なるゴミ捨て場とみるだけでは理解できない事象のあることに気付き、指摘していたものである。

この貝塚=ゴミ捨て場説に強く異を唱えた人物が河野廣道であり、貝塚から人骨が発見されることをアイヌ民族の「物送り場」と同様な考え方で矛盾なく理解でき、「目的は同じ廃物置場ではあるが、本質的には全く異なる見方で取扱はれた」(河野 1935) と指摘したのである。また G. J. Groat も、「死者を貝塚に埋葬する事を好んだ」として、「貝塚は石器時代人に取って非常に貴い所であり」、「宗教上の聖なる所と思つた」(グロート 1941) ことを力説した。Groat はアイヌ民族のイオマンテについて触れていないが、両者に共通するのは、現代人と縄文人との間には、死者や廃物とその措置に対する意識・行動が大きく異なることを指摘したことである。河野の説は西村正衛により評価され、「貝塚はすべて生命をうしなったもの—現世の生活から離れたものの存在する場所としてみなされていたのではないかと推定」(西村 1956) された。また大場利夫も「貝層の中に丁重に葬られた人骨を見ただけで、貝塚は単なる廃棄場ではなかったことをうなずかせるものがある」(大場 1983) とした。

従つて、「貝塚の何かについては、すでにあらゆる考古学者が、こぞって食糧残滓のゴミ捨て場であると

の見解をとっている」(後藤1985)という後藤和民の説明は正確とは言えないが、「ゴミ捨場」という表現は決して適切なものではなく」という件は耳を傾ける必要がある。問題は「ゴミ捨場」という表現の中には、すでに現代のわれわれの日常的な既成概念やイメージが潜在しているので、その先入観によって縄文貝塚を特定な価値や意義に限定してしまう危険性があることにある。そして「結果論的には「ゴミ捨場」に違いないとしても」、「むしろ、そのような結果や現象を招来すべき原因、すなわち当時の人文集団の具体的な文化活動そのものやその目的意識（志向性）および歴史的意義をこそ究明しようとしているはずである」と結んでいる。貝塚を「ゴミ捨て場」と説明されると、「ゴミ捨て場」という言葉に「汚い」という不浄観を抱いている私たちは、貝塚を「汚いゴミ捨て場」と思うことになり、「汚いゴミ捨て場」がどうして大切なものであり、また保存しなければならないのかと思うのも道理ということになる。しかし、この難しい問題について後藤は問題提起で終わっている。

これは土岐仲男が日本語には貝塚と言う名称はあるが芥捨場の意味に相当する名称が欠けていると言っていたことに通じる。そして貝塚という言葉について、土岐は塚というと岡を想像したくなるが、盛り上がりの無いものも貝塚と呼ぶのは変だから、貝塚と言う方が少しあまだと述べていた(土岐1934)。これに対して大場利夫は、「貝塚は祭壇である」から介壇よりも貝塚の方が適切であると述べた(大場1983)。これは塚の正字である冢は、「みたまや(廟)」、ひいては「墓」を意味すると言われるあたりと関係するのである。しかし、中国は扱くとしても、日本の貝塚の場合は「盛土」や「丘」を字義として「貝を盛り上げたもの」を意味したのである。これを厳格に当て嵌めると、貝で盛り上がる加曾利貝塚は「貝塚」で、近くの千葉市若葉区藤立貝塚など盛り上がりの見られない貝塚は、「貝塚」ではなく「貝場」だという妙なことになりかねない。両者の真逆な意見に戸惑うところであるが、量に關係なく食料として貝が運ばれた遺跡を「貝塚」と呼ぶことが実情に合った定義であろう。

中村若枝は、「貝塚は過去の人類が残したごみ捨て場ともいえる。しかし、同時に貝塚には人骨の埋葬がみられたり、獸骨などが意図的に配置されるなど祭祀・儀礼的な場としても使用されていた痕跡がみられる。そのため現在のごみ捨て場の感覚で、貝塚全体を捉えることは必ずしもできない」(中村1994)と述べていたが、呼称の代案は示されなかった。鈴木公雄が「貝塚とは shell mound ではなく、そこに住みついた人々の生活の断片を封じ込んでいる場所という意味で、shell midden ないし kitchen midden と呼ぶ方がふさわしい。日本語で貝塚を「先史時代のごみ捨て場」というと、何かきたならしいイメージを感じさせるが、じっさいにはこの方が意味としては適切である」(鈴木1989)と述べていたのは、學問上の正論であるとしたとしても、後藤が言うようにそこの「汚い」という現代的なマイナーな評価が伴ってしまうのであれば、「ゴミ捨て場」は不適切な説明になってしまう。単に「物送り場」と言うだけでは言葉足らずの感があり、また「汚いと思われていなかったゴミ捨て場」というような長たらしの文章では、一言で言い表せない点で不適格である。実態に合った適切な呼称の模索が求められているが、最適な呼称が合意されるまでは、「不浄観を伴わない昔のゴミ捨て場」という解説を付けて貝塚の語を使うしかないであろう。

註

1. 栗原東洋(栗原1974・1975)の黒会に対する八幡一郎の回答の一部を引用。

2. 筆者は千代田遺跡IV区5号住居址の主体貝は、報告のハマグリではなくオキアサリであると指摘したことがある(堀

越 1983)。見学の際、加曾利貝塚や市川市の貝塚に親しんだ目には、オキアサリが大量に露出している光景に驚いたことを覚えている。ハマグリなら要らないが、オキアサリなので許可を得て少量を小袋に入れたまでは良かったが、これを帰途までに紛失してしまったことが悔やまれる。

3. 地理学者の一部は、東木の方法を踏襲して今日の等高線で貝塚の時期ごとの海岸線を推定し、前期の海岸線を標高 13 m としていた (三友 1969、菊地 1974)。
4. 一般書では横山祐典が 2007 年に紹介したが、理屈としては杉村新が 1979 年に指摘し、また貝塚実平も約 6 千年前から後はほぼ現在の水準に止まった (貝塚 1992) と述べていた。
5. 杉村新は、1979 年の論文で海面の最高期は 7 千年前ごろまで少し遅らせた方がいいのかもしれないと言っていた。これは早期末葉あたりの年代となる。考古学では古くは川崎純徳らが茅山海進を指摘し (川崎ほか 1968)、最近では鈴木正博が早期後葉までの海進と前期初頭の海退への転換を指摘している (鈴木 2010)。また横山祐典もユースタティックな海面上昇の終わりを 1998 年では 6 千年前としていたが、2007 年には約 7 千年前と修正した。
6. B の曲線については、A の曲線は歐米の実際の海面変化曲線に合わないので、何の説明もなく結果を合わせるために結論を改変したものだと杉村新は言う。
7. 加曾利北貝塚と南貝塚、市原市天王貝塚と山倉堂谷貝塚は、夫々併せて 1 か所とした。
8. 以下で扱う内容は、前稿 (堀越 2017) と一部重複する部分があることを了解願いたい。

参考・引用文献

- E.S. Morse 1879 "Sell Mounds of Omori" *Memoirs of Science Department, University of Tokio Japan. Volume I Part I*
エドワルド、エス、モールス撰著 矢田部良吉口訳 1879『大森介墟古物篇』理科会社第一帙上冊 東京大学法理文学部
坪井正五郎 1886a『東京近傍古跡指明図附記』『東京人類学会報告』第 1 卷第 5 号 東京人類学会
坪井正五郎 1886b『東京近傍貝塚總論』『東京地学協会報告』第 8 卷第 4 号 東京地学協会
神風山人 1887『貝塚ヲ貝塚村ニ探ルノ記』『東京人類学会報告』第 2 卷第 13 号 東京人類学会
上田英吉 1887『下絶園千葉郡介墟記』『東京人類学会雑誌』第 2 卷第 19 号 東京人類学会
若林勝邦 1892『下絶、武蔵、相模ニ於ケル貝塚ノ分布』『東京人類学会雑誌』第 7 卷第 73 号 東京人類学会
八木奘三郎 1893『千葉地方貝塚探査報告、古作の部』『東京人類学会雑誌』第 8 卷第 84 号 東京人類学会
山崎直方 1893『下絶曾谷、千葉貝の二塚に就て』(上記文献と同じ)
八木奘三郎・下村三四吉 1894『下絶阿玉台貝塚探査報告』『東京人類学会雑誌』第 9 卷第 97 号 東京人類学会
東京帝国大学編 1897『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第 1 版 田中正太郎・林 若吉編)
東京帝国大学編 1898『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第 2 版 野中完一増訂)
沼田頼輔 1900『貝塚』『考古』第 1 編第 7 号 考古学会
東京帝国大学編 1901『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第 3 版 野中完一増訂)
坪井正五郎 1904『紀念遠足堀内貝塚実査に就いて』『東京人類学会雑誌』第 20 卷第 224 号 東京人類学会
坪井正五郎 1905『日本における貝塚の歴史』『東京人類学会雑誌』第 21 卷第 237 号 東京人類学会
八木奘三郎・中澤澄男 1906『日本考古学全史』博文館
坪井正五郎 1907a『人類学叢書』博文館
坪井正五郎 1907b『遠足会の結果』『東京人類学会雑誌』第 23 卷第 260 号 東京人類学会

2018年3月

- 無名姓 1911「上総市原郡原村発見の石器時代遺物」『東京人類学会雑誌』第26卷第298号 東京人類学会
柴田常恵 1911「上総国市原郡原村貝塚」『人類学雑誌』第27卷第4号 東京人類学会
上羽貞幸 1915「東京人類学会遠足会」『人類学雑誌』第31卷第10号 東京人類学会
小田桐健児 1915「下總加曾利貝塚踏査」(上記文献に同じ)
東京帝国大学編 1917『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第4版 柴田常恵増訂)
清野謙次 1925『日本原人の研究』岡書院
平瀬信太郎 1926「加曾利貝塚の貝類について」『人類学雑誌』第41卷第7号 東京人類学会
東木龍七 1926a「地形と貝塚分布より見たる関東低地の旧海岸線[一]、[同二]、[同三]」『地理学評論』第2卷第7、8、9号 日本地理学会
東木龍七 1926b「貝塚分布の地形学的考察」『人類学雑誌』第41卷第11号 東京人類学会
甲野 勇 1928「埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告」史前学会小報2 史前学会
東京帝国大学編 1928『日本石器時代遺物発見地名表』(第5版 八幡一郎・中谷治宇二郎増訂)
八幡一郎 1929「先史時代遺跡」『考古学講座』第9号 国史講習会
佐藤虎雄 1930『日本考古学』受験講座刊行会
大山 柏・宮坂光次・池上啓介 1933「東京湾に注ぐ主要渓谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の縄年学的研究予報【第1編】」
『史前学雑誌』第3卷第6号代冊 史前学会
土岐仲男 1934「貝塚なる名称について」『史前学雑誌』第6卷第5号 史前学会
山内清男 1934「貝塚は何故日本海沿岸に少ないか」『ドルメン』第3卷第9号 岡書院
田澤金吾 1935「貝塚」「ドルメン」第4卷第6号 岡書院
土岐仲男 1935「日本貝塚の地域的研究に就いて」(上記文献に同じ)
河野廣道 1935「貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ」『人類学雑誌』第50卷第4号 東京人類学会
史前学会 1936「加曾利貝塚の概要」(パンフレット)
直良信夫 1938「史前日本人の食糧文化[一]」『人類学・先史学講座』第2卷 雄山閣
樋口清之 1939『日本原始文化史』三笠書房
田澤金吾 1940「貝塚」『人類学・先史学講座』第15卷 雄山閣
三森定男 1941『日本原始文化』四海書房
八幡一郎・和島誠一 1941「武藏野台地の遺跡と遺物」『武藏野』科学主義工業社
ジエラード・グロート 1941「貝塚は捨處であるか」『民族文化』第2卷第11号 山岡書店
直良信夫 1942「古代日本人の生活」文祥堂
酒詰仲男 1942「南関東石器時代貝塚の貝類相と土器形式との関係に就いて」『人類学雑誌』第57卷第6号 日本人類学会
江坂輝亦 1943「南関東新石器時代貝塚より観たる沖積世に於ける海進、海退」『古代文化』第14卷第4号 日本古代文化
化学会
大場磐雄 1943「日本古文化序説」明世堂
甲野 勇 1947『圖解先史考古学入門』山岡書店
後藤守一 1947『私たちの考古学(先史時代篇)』八重山書店
酒詰仲男 1948「貝塚の話」影考書院
酒詰仲男 1950『縄文化』日本史教授用パンフレット第2集 平安文庫

- 酒説仲男 1952 「編年上より見た貝塚（概説）—特に関東地方の貝塚について—」『日本民族』岩波書店
- 武田宗久 1953 「原始社会」『千葉市誌』千葉市
- 岡田茂弘 1954 「考察」『著田高田貝塚』學習院高等科史学部
- 渡 正雄 1954 「後氷期の世界」筑地書館
- 伊藤和夫 1955 『千葉県縄文遺跡地名表』第1輯、『同』第2輯 私家版
- 直良信夫 1955 「貝づか—昔の生活の調べかた—」さ・え・ら書房
- 杉村 新 1956 「関東南部の沖積世に関する諸問題」『石器時代』第3号 石器時代文化研究会
- 西村正衛 1956 「信仰」『日本考古学講座 3 縄文化』河出書房
- 岡本 勇 1957 「堀之内貝塚の形状」『人類学雑誌』第65巻第5号 日本人類学会
- 伊藤和夫 1958 「貝塚より見た千葉市附近の海進海退」『古代』第28号 早稲田大学考古学会
- 伊藤和夫 1959a 「千葉県石器時代遺跡地名表」『千葉県石器時代遺跡地名表』千葉県教育委員会
- 伊藤和夫 1959b 「千葉県の石器時代文化」（上記文献に同じ）
- 酒説仲男 1959 「日本貝塚地名表」土曜会
- 酒説仲男 1961 「日本縄文石器時代食料統説」土曜会
- 川戸 彰 1961 「野呂山貝塚」『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査（本郷）』千葉県教育委員会
- 神尾明正 1963 「園生（そんのう）貝塚の発掘による地形面とその考察」『千葉大学文理学部紀要』第4巻第1号
- 岡本 勇 1963 「加曾利貝塚の意義」『考古学研究』第10巻第1号 考古学研究会
- 多田文男 1964 「自然環境の変貌—平野を中心として—」東京大学出版会（初出論文の発行年不詳）
- 直良信夫 1965 「古代人の生活と環境」校倉書房
- 和島誠一 1965 「後氷期海進海退論の方法的反省」『日本考古学協会第31回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 江坂輝弥 1965 「生活の舞台」『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房
- 杉原往介 1966 「加曾利貝塚」中央公論美術出版
- 岡田茂弘 1968 「貝塚の保存について」『日本歴史』第246号 吉川弘文館
- 川崎純徳・寺門義範・黒田万里子・黒山佳子 1968 「茨城県宮後遺跡の調査—茅山海進に関する試論—」『常總台地』
- 3 常總台地研究会
- 和島誠一ほか 1968 「関東平野における縄文海進の最高水準について」『資源科学研究所彙報』第70号
- 三友国五郎 1969 「関東地方の先史集落」『日本地誌ゼミナールⅢ 関東地方』大明堂（初版1960年）
- 後藤和民 1970 「原始集落研究の方法論序説」『駿台史学』第27号 駿台史学会
- 柿沼 広ほか 1970 『紙面貝塚発掘調査概報』千葉県文化財調査抄報第4集 千葉県教育委員会
- 江坂輝弥 1971 「遺跡の分布からみた海岸線の変化」『月刊海洋科学』第3巻第9号 海洋出版株式会社
- 八幡一郎 1972 「総括」『千代田遺跡一千葉県印旛郡四街道町一』四街道千代田遺跡調査会
- 後藤和民 1973 「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」『房總地方史の研究』雄山閣
- 栗原東洋 1974 「千代田遺跡・その紹介と論点の検討」『四街道町の文化財』第1号 四街道町
- 西山太郎 1974 「千葉市荒屋敷貝塚—遺構確認調査報告書—」千葉県都市公社
- 武田宗久 1974 「石器時代の自然と人類」『千葉市史 第1巻 原始古代中世編』千葉市
- 後藤和民 1974 「社会と集落」（上記文献に同じ）
- 西村正衛 1974 「貝塚を研究してどんなことが明らかになったか」『日本考古学の視点 上巻』日本書籍株式会社

2018年3月

- 菊地利夫 1974『東京湾史』環境科学ライブラリー⑧ 大日本図書株式会社
- 栗原東洋 1975『四街道町史(第1部・通史編)』四街道町
- 貝塚爽平・杉原重夫 1976「加曾利貝塚の地理」「加曾利南貝塚」中央公論美術出版
- 加曾利貝塚博物館編 1976『千葉市内縄文時代の遺跡地名表』『千葉市史 史料編1 原始古代中世』千葉市
- 田原 豊・中村 純 1977「千葉県における縄作の起源に関する花粉分析学的研究」『昭和51年度特定研究「縄作の起源と伝播」年次報告 縄作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究一中間報告一』中村純編
- 近藤義郎・佐原 真記 1977『大森貝塚』『考古学研究』第24卷第3・4号 考古学研究会
- 鶴田良一ほか 1979『千葉県東南部ニュータウン7木戸作遺跡(第2次)一』千葉県文化財センター
- 松島義章 1979「木戸作貝塚周辺の沖積低地」(上記文献に同じ)
- 貝塚爽平・阿久津 純・杉原重夫・森脇 広 1979「千葉県の低地と海岸における完新世の地形変化―付、都川・古山川合流点付近沖積層の珪藻群集一」『第四紀研究』第17卷第4号 日本第四紀学会
- 松島義章・小池裕子 1979「自然貝層による内海の海況復原と縄文時代の遺跡」『貝塚』第22号 物質文化同人
- 遠藤邦彦 1979「遺跡の分布―縄文海進との関連で―」『自然科学と博物館』第46卷第4号 科学博物館後援会
- 鈴木公雄 1979「貝塚の調査」(上記文献に同じ)
- 杉村 新 1979「海面変動―地球物理学と地形学・地質学との接点」『月刊地球』第1卷第11号 海洋出版株式会社
- 中田 高 1980「完新世海成段丘からみた地震性地盤変動と海水準変動―喜界島と房総半島南部の例を中心として―」『月刊地球』第2卷第1号 海洋出版株式会社
- 松島義章 1980「千原台地区の沖積低地」『千原台ニュータウン1』千葉県文化財センター
- 金子浩昌 1980「貝塚に見る縄文人の漁撈生活―縄文時代貝塚の類型と特徴―」『自然』第408号 中央公論社
- 千葉市史跡整備基本計画策定委員会・千葉市教育委員会文化課 1981『千葉市史跡整備基本構想(中間報告)』
- 堀越正行 1983「谷奥貝塚の意味するもの」『史館』第15号 史館同人
- 千葉県教育委員会 1983『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』
- 大場利夫 1983『貝塚』『考古学ジャーナル』第216号 ニューサイエンス社
- 竹内理三編 1983『日本歴史地図原始古代編』、別巻『考古遺跡・遺物地名表』柏書房
- 近藤義郎・佐原 真記 1983『大森貝塚―付開拓資料一』岩波文庫青432-1 岩波書店
- 後藤和民 1985「馬蹄形貝塚の再吟味―東京湾沿岸における縄文集落の一様相について」『論集日本原史』吉川弘文館
- 千葉市史跡整備基本計画策定委員会・千葉市教育委員会文化課 1985『千葉市史跡整備基本計画』
- 日本第四紀学会 1986『INQUA日本支部連絡紙No.1~12(1952~1956)復刻版』
- 武田宗久 1988「縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進・海退(1)」『千葉市立加曾利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』千葉市立加曾利貝塚博物館
- 阪口 豊・谷村好洋 1988「谷津台遺跡の古環境」「谷津台遺跡」山武考古学研究所
- 鈴木公雄 1989『貝塚の考古学』UP考古学選書5 東京大学出版社
- 武田宗久 1990「縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退(3)」『貝塚博物館紀要』第17号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 貝塚爽平 1992『平野と海岸を読む』自然景観の読み方5 岩波書店
- 杉原重夫 1993「千葉市・加曾利貝塚古山支谷における泥炭中の木片」「東北日本における後期更新世以降の古環境と地形発達史の研究— ^{14}C 年代測定データとその意義―」明治大学人文科学研究所紀要第33冊

- 中村若枝 1994 「貝塚」、「貝層」『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 添澤成視 1994 「山倉天王・堂谷貝塚」『市原市文化財センター年報 平成元年度』
- 小笠原永隆編 1998 『千葉県東南部ニュータウン19—千葉市有吉北貝塚1(旧石器・縄文時代)一』千葉県文化財センター調査報告第324集
- 横山祐典 1998 「サンゴ骨格の年代測定と第四紀後期の海面変動」『地質ニュース』第527号 地質調査所
- 千葉県文化財センター 1999 『千葉県内貝塚分布図・地名表』『千葉県文化財センター研究紀要』19
- 遠藤邦彦ほか 1999 『三郷のあゆみ』三郷市
- 堀越正行 2000 「姥山貝塚」「曾谷貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』千葉県
- 古内 茂 2000 「長谷部貝塚」(上記文献に同じ)
- 文化庁文化財部記念物課 2001 「埋蔵文化財保護体制に関する調査研究結果の報告について」『月刊文化財』第459号 第一法規出版
- 西野雅人 2004 「貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』千葉県
- 本間岳人ほか 2007 「日本考古学は品川から始まった一大森貝塚と東京の貝塚—」品川区立品川歴史館
- 鶴岡英一ほか 2007 『市原市西広貝塚Ⅲ』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告第2集 市原市教育委員会
- 市原市埋蔵文化財調査センター編 2007 『発掘いちはらの遺跡』No.2 市原市教育委員会
- 古内 茂 2007 「大規模貝塚形成に関する一試論—東京湾東岸の貝塚群を中心として—」『縄文時代』第18号 縄文時代研究会
- 横山祐典 2007 「地球温暖化と海面上昇—冰床変動・海水準変動・地殻変動」『地球史が語る近未來の環境』東京大学出版会
- 鈴木正博 2010 「弘源寺貝塚研究序説—環境(気候)変動の改訂と湾奥貝塚の「印象風土論」—」『福島考古』第51号 福島県考古学会
- 湖口淳一 2011 「遺跡から探る縄文時代早・前期の千葉市」『平成22年度千葉市遺跡発表会要旨』千葉市教育振興財團埋蔵文化財調査センター
- 堀越正行 2015 「縄文時代の貝塚概観—千葉県を中心として—」『JOMON』vol.4 国際縄文学会
- 古澤要史 2015 「新潟県における縄文時代のおわり」『平成26年度越後国城確定1300年記念事業 記録集』新潟県教育委員会
- 堀越正行 2017 「日本の貝塚研究における加曾利貝塚の位置と意義」『貝塚博物館紀要』第43号 千葉市立加曾利貝塚博物館

訂正：本誌第43号の拙論17頁8-9行目で、「1974年に取り上げられる（堀越1974a・b）まで江見のムキミ屋説は長い間忘れられていた」と記したが、福津正志が1935年に「原始日本の経済と社会」（『歴史学研究』第4巻第4-5号）で紹介していたことを知ったので、当該箇所の冒頭に「福津正志が1935年に触れたくらいで」の文章を追加したい。

貝塚博物館紀要第 44 号

2018 年 3 月